

エルニーニョ監視速報 (No. 89)

太平洋赤道域の海水温等の 2000 年 1 月の状況、及びエルニーニョ監視海域の海面水温の今後の見通しは、以下の通りである。

2000 年 1 月の状況

- ① エルニーニョ監視海域(北緯 4 度～南緯 4 度、西経 150 度～西経 90 度)の 1 月の海面水温偏差は、 -1.6°C であった(図 1、表)。
- ② 1 月の太平洋赤道域の海面水温は、日付変更線から西経 95 度にかけて平年より 1°C 以上低く、西経 135 度付近と西経 125 度付近では -2°C 以下の負偏差が見られた。一方、東経 150 度以西では $+0.5^{\circ}\text{C}$ 以上の正偏差が見られた(図 2)。
- ③ 1 月の南方振動指数は $+0.4$ であった(表)。(南方振動指数は貿易風の強さの目安であり、正(負)の値は貿易風が強(弱)いことを示す。)
- ④ 太平洋の赤道に沿った表層(海面から深度数百 m までの領域)水温の断面図では、12 月に比べ東部の負偏差、西部の正偏差ともに強まった(図 3)。太平洋の赤道に沿った海面から深度 260m までの平均水温平年偏差の経度-時間断面図では、西部の正偏差の中心に $+2^{\circ}\text{C}$ 以上の領域が現れるとともに、正偏差域は東に拡大して、月末にはその東端が西経 165 度付近に達した(図 5)。

表 エルニーニョ監視指数

	1999 年												2000 1 月
	2 月	3 月	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月		
月平均海面水温 ($^{\circ}\text{C}$)	25.5	26.8	26.7	26.4	25.5	24.8	24.0	23.8	23.6	23.2	23.4	23.8	
平年偏差 ($^{\circ}\text{C}$)	-0.7	-0.1	-0.4	-0.2	-0.6	-0.4	-0.6	-0.8	-1.0	-1.4	-1.5	-1.6	
5 か月移動平均 ($^{\circ}\text{C}$)	-0.7	-0.5	-0.4	-0.3	-0.5	-0.5	-0.7	-0.8	-1.1	-1.2			
南方振動指数	+0.8	+0.8	+1.8	+0.3	+0.1	+0.6	+0.0	-0.1	+1.1	+1.1	+1.5	+0.4	

エルニーニョ監視海域：北緯 4 度～南緯 4 度、西経 150 度～西経 90 度

海面水温の平年値は、1961～1990 年の 30 年平均値である。

気象庁では、エルニーニョ監視海域の海面水温偏差の 5 か月移動平均値が 6 か月以上続けて $+0.5^{\circ}\text{C}$ 以上となった場合をエルニーニョ現象、6 か月以上続けて -0.5°C 以下となった場合をラニーニャ現象としている。

5 か月移動平均値の 下線部 は $+0.5^{\circ}\text{C}$ 以上となった月を、斜字体は -0.5°C 以下となった月を示す。

南方振動指数の!印は暫定値であることを示す。

エルニーニョ監視海域
 (北緯 4 度 ~ 南緯 4 度、
 西経 150 度 ~ 西経 90 度)

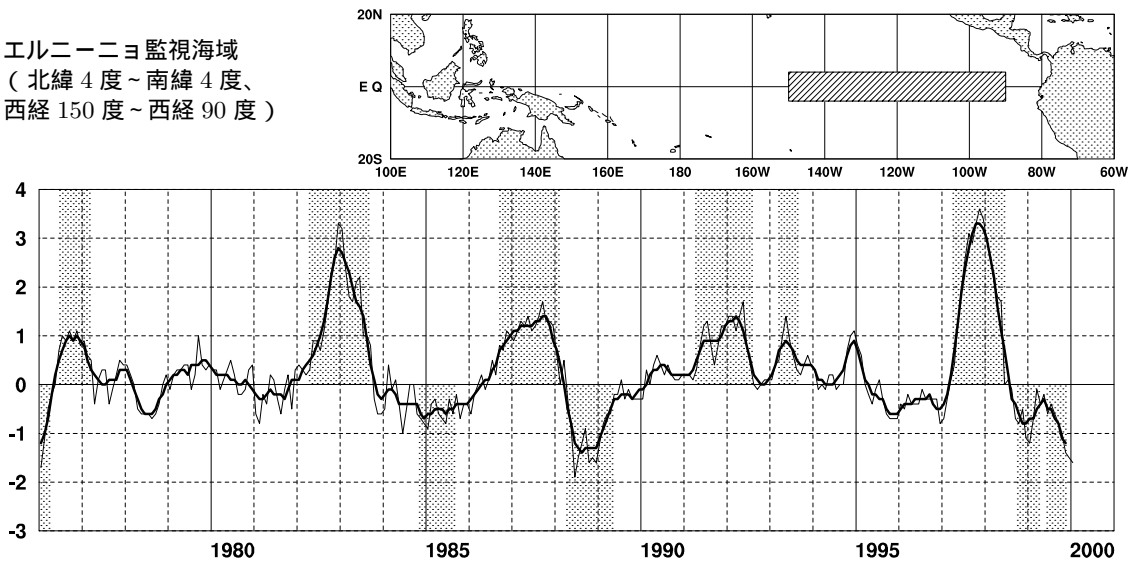


図 1 エルニーニョ監視海域の月平均海面水温偏差(°C)の推移(1976年1月~2000年1月)。折線は月平均値、滑らかな太線は5か月移動平均値を示し、正の値は平年(1961~90年の30年平均値)より高いことを示す。エルニーニョ現象の発生期間は上側に、ラニーニャ現象の発生期間は下側に、それぞれ陰影を施してある。

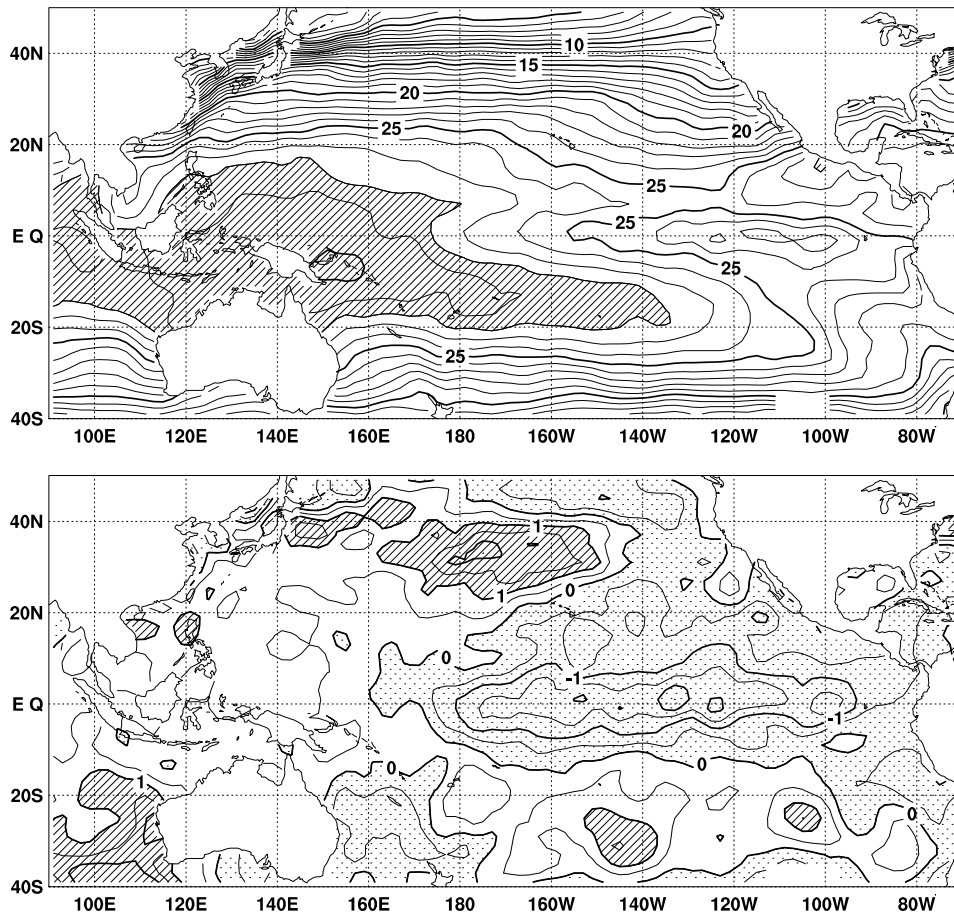


図 2 2000年1月の海面水温図(上)及び平年偏差図(下)。海面水温図の太線は5°C毎、細線は1°C毎の、平年偏差図の太線は1°C毎、細線は0.5°C毎の等値線を示す。海面水温図の陰影部は28°C以上の領域を、偏差図の濃い(薄い)陰影部は1°C以上の正偏差域(0°C以下の負偏差域)を示す(平年は1961~90年の30年平均値)。

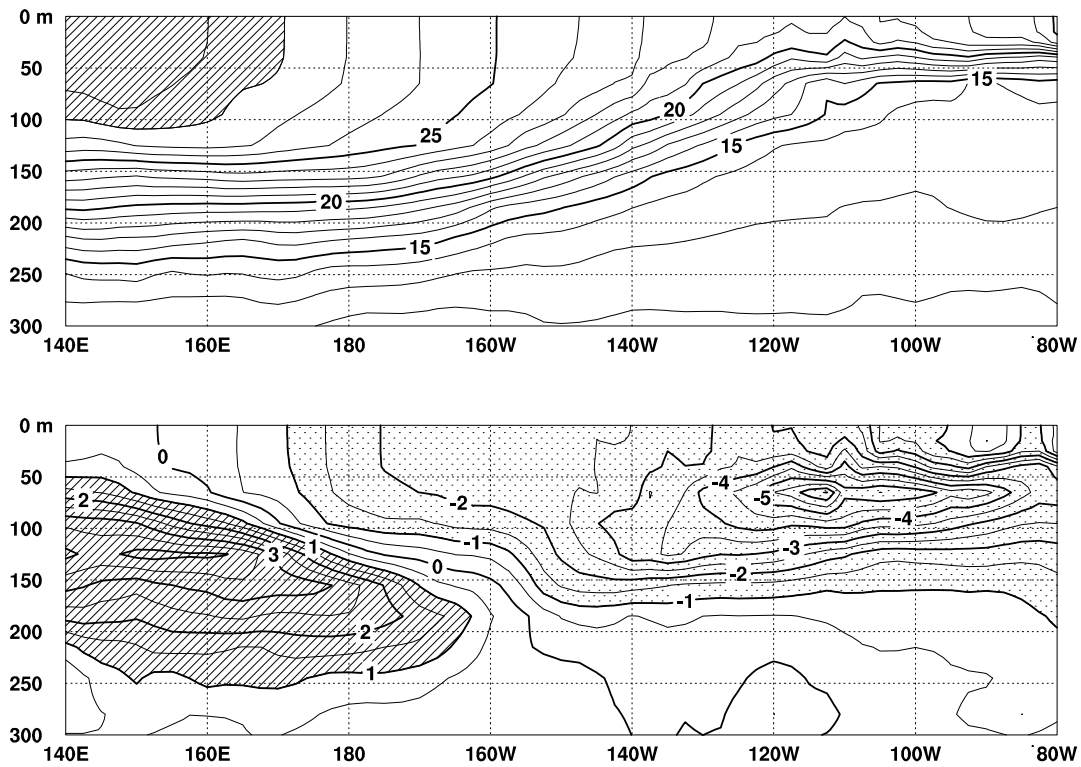


図3 2000年1月の太平洋の赤道に沿った水温(上図)及び平年偏差(下図)の断面図(海洋データ同化システムによる)。上図の等値線間隔は 1°C で 28°C 以上には陰影を施し、下図の等値線間隔は 0.5°C で $+1^{\circ}\text{C}$ 以上(-1°C 以下)の偏差には濃い(薄い)陰影を施した(平年は1987~98年の12年平均値)。

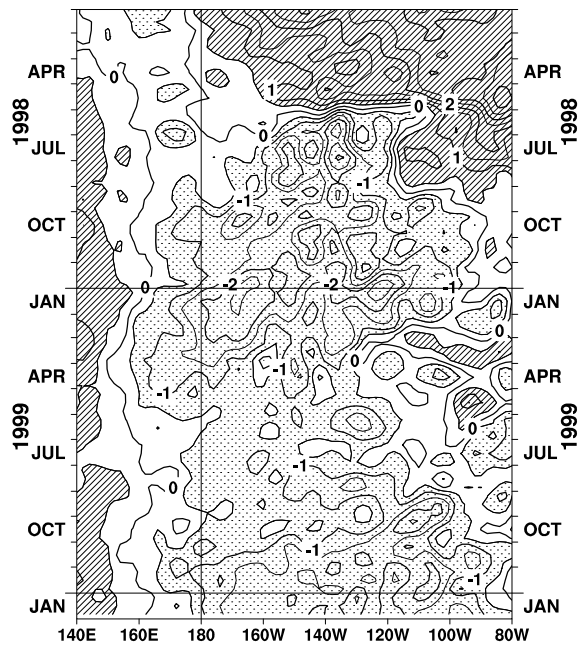


図4 太平洋の赤道に沿った海面水温平年偏差の経度-時間断面図。等値線の間隔は 0.5°C 、 $+0.5^{\circ}\text{C}$ 以上(-0.5°C 以下)の偏差には濃い(薄い)陰影を施した(平年は1961~1990年の30年平均値)。

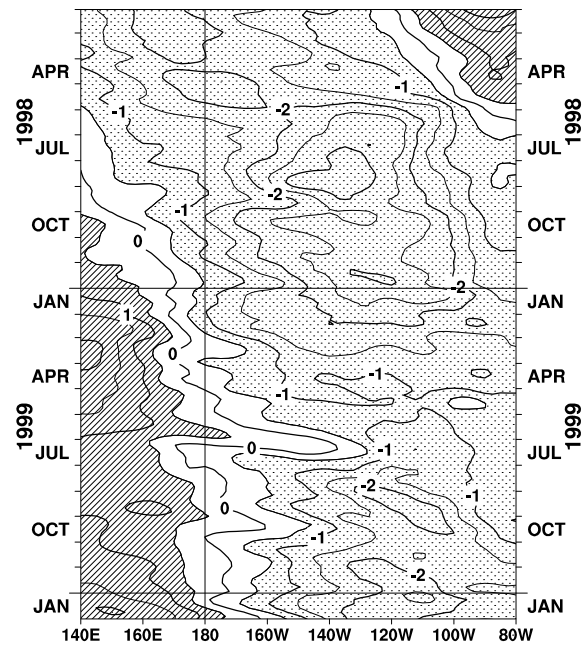


図5 太平洋の赤道に沿った海面から深度260mまでの平均水温平年偏差の経度-時間断面図(海洋データ同化システムによる)。等値線の間隔は 0.5°C 、 $+0.5^{\circ}\text{C}$ 以上(-0.5°C 以下)の偏差には濃い(薄い)陰影を施した(平年は1987~98年の12年平均値)。

エルニーニョ現象等の今後の見通し（2000年2月～2000年8月）

現在のラニーニャ現象は春まで続き、その後次第に終息に向かうものと見られる。

【解説】

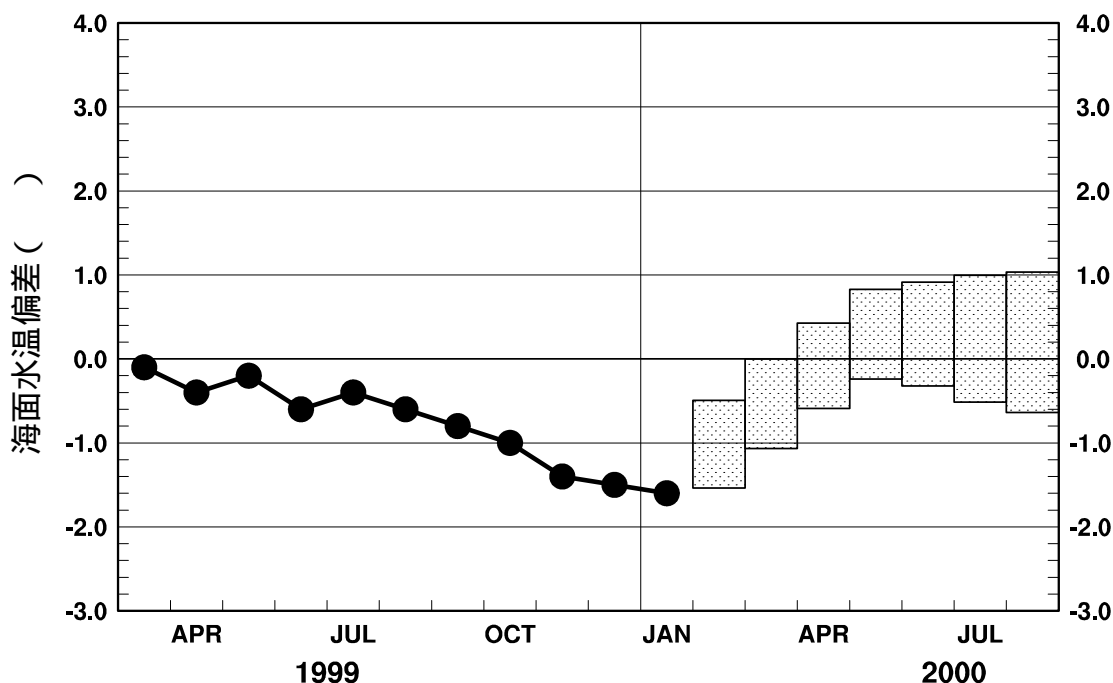
監視海域の海面水温偏差の5か月移動平均値は、昨年6月以来6か月連続して -0.5°C を下回り、ラニーニャ現象の基準を満たした。

1月の太平洋赤道域における表層水温は、西部の正偏差と東部の負偏差がともに12月よりも強まり、今回のラニーニャ現象が強まってきているように見えるが、南方振動指数に見られるように貿易風は12月に比べてやや弱まり、その結果西部太平洋の暖水が東へ広がり始めた。

エルニーニョ予測モデルによれば、監視海域の海面水温は今後春にかけて平年に近付き、夏以降は平年並またはやや高めの状態に移行する予測結果を示している（下図）。

過去においては、監視海域の海面水温が1年半以上持続して負偏差であった場合、春を境として正偏差に移行する例が多い。今回のラニーニャ現象も西部太平洋における暖水の蓄積と東方への拡大など、現象の最盛期を過ぎつつある兆候が見られ、ラニーニャ現象は春以降終息に向かう可能性が高いと判断される。

エルニーニョ予測モデルによるエルニーニョ監視海域の海面水温偏差予測



この図は、先月までのエルニーニョ監視海域の海面水温偏差の推移（折れ線グラフ）とエルニーニョ予測モデルから得られた今後の予測（ボックス）を示したものです。各月のボックスは、予測される海面水温偏差が70%の確率で入る範囲を示します。

来月の発表は、3月10日14時の予定です。

内容に関する問い合わせ先：エルニーニョ監視予報センター
（電話 03-3212-8341 内線 5134、5135）